

作家の柳広司氏が沖縄と向き合った『南風（まぜ）に乗る』を上梓している。本土から切り離され、米軍の支配下に置かれた沖縄が本土に復帰するまでの、詩人の山之口獏、政治家の瀬長亀次郎、英文学者の中野好夫の三氏が沖縄とどのように関わったかを描いたドキュメンタリータッチの小説である。沖縄では、南風は「はえ」と読み、漁師言葉では南風は「良いもの」という認識があるそうだが、「はえ」にすると、本土復帰は良かったと取られてしまう。沖縄から吹いて来る「良い風」に乗らなければならないのは本土なんだという思いを込めて「まぜ」にしたと、『週刊金曜日』のインタビューで言っていた。柳氏の沖縄に対する愛、尊敬の思いが真っ直ぐに伝わってくる。

本土決戦を遅らせるために、「捨て石作戦」としての沖縄戦は日本で唯一の地上戦で、沖縄住民は日本軍と一体になって、4人に1人が死ぬような悲劇的な戦争に巻き込まれた。沖縄の友人から、日本軍は怖かったが、米軍は親切だったとよく聞いた。しかし、それは短期間で、米軍の施政権下で、基地を作るために銃とブルドーザーで土地は接收され、米軍人による殺人、強姦、強盗が頻発し、基地に逃げ込めば無罪になり、被害者は泣き寝入りの状態であった。米軍民政府の布告、布令及び指令には従うことが命じられ、ネコ（アメリカ）の許す範囲においてしかネズミは遊ぶことができないとされた。

1952年、サンフランシスコ講和条約が発効したが、その三条には「北緯29度以南の南西諸島（琉球諸島、大東諸島、小笠原群島）の領域及び住民に対し、アメリカ合衆国は行政、立法、司法上の全権力を行使する権利を有する」とある。日本は琉球（沖縄）、奄美、小笠原諸島に住む人たちを人身御供としてアメリカに差し出す代わりに国際社会に復帰したのである。米軍の思いのままの支配が許容された訳で、そのような中、瀬長亀次郎は演説した。「われわれ沖縄は、日本の一員としてアメリカ相手に戦争をして、その戦争に負けた。家も財産もみんな焼かれた。沖縄はいまや無一文だ。百歩譲って、ここまでは仕方がない。けれど、戦争は終わった。戦争が終わったあとも、アメリカは沖縄に居残って好き勝手している。沖縄で土地を奪い、家を焼き、罪を犯しても罰せられない。女性に乱暴したり、面白半分にな人を銃で撃っても、連中は罰せられない。どう考えても、これは間違いだ。」「海の向こうから来て、沖縄の土を、水を、そして沖縄の土地を勝手に奪っているアメリカは、泥棒だ。沖縄には泥棒はいらない。アメリカは沖縄から出ていけ！」

瀬長氏の闘いを撮った『米軍が最も恐れた男』を観た。米軍に逮捕され、獄に投げ込まれたが、不屈の精神で、沖縄の自立と独立を求め続けた。沖縄人は強力に支持した。1年半後、獄中から解放された時、出獄歓迎大会には1万人を超す人々が集まった。獄中で、本を読み、病気を治すことができたのは、米軍ではなく、皆さんが払ってくれた税金のおかげだと言い、「私はこれから沖縄のために働くことでお返ししたいと思います。基地権力者のためでなく、沖縄のために働く」と演説している。沖縄には「肝苦（ちむぐり）サン」という言葉がある。「相手の痛みを自分のものとして感じて辛くなる」という意味で、共同体の底流をなす重要な感情である。沖縄には苦悩を共有する「肝苦サン」が生きて働いている。瀬長氏は、理不尽な米軍統治からの脱却は、日本国憲法が及ぶ「本土復帰」しかないと考え、本土なみ復帰を目指すようになる。沖縄では、米軍に禁止されていた日の丸を掲げ、復帰運動が盛り上がっていった。1972年に、沖縄は日本に復帰し、東京と沖縄で盛大な復帰記念式典が行われた。しかし、瀬長氏は、沖縄返還協定では、日米による沖縄共同管理だと強く反対した。これが、現在まで続いている。